

### 「東北発 ニッポン元気アクション」事業

## 県境を越えた新聞社の地域連携により東北の新しい魅力を発信し慢性化する若者の地域離れを防ぎ東北の明るい未来づくりを目指す

東北の6県7新聞社の共同プロジェクト「東北発 ニッポン元気アクション」。人口減が進む東北にこれから必要なことは、新たな東北の魅力。それを見つけ、育み、伝えていくことで、若い世代の流出を防ぎ、東北の活性化を図ろうという取り組みだ。東北が元気になれば、日本も元気になる。

### 「東北から日本を元気に」をテーマに7新聞社が取材する東北の新しい魅力を発信

東北6県の主要新聞社(東奥日報社、秋田魁新報社、岩手日報社、山形新聞社、河北新報社、福島民報社、福島民友新聞社)で構成する東北七新聞社協議会では、県境を越えた新たな地域連携を目指して、1995年より地域活性化へ向けて毎年さまざまな視点からキャンペーンを行ってきた。2012年の「東北発 ニッポン元気会議」では、東北のチカラをテーマに、震災復興への取り組みや課

題を各県が共有することで、東北が一丸となって向かうべき未来ビジョンを提唱した。

そして2013年は、新たなプロジェクトとして、若者に向けて東北の新しい魅力を創出することを目的とした「東北発 ニッポン元気アクション」をスタート。背景には、東北地方の高い人口減少率と、慢性化する若者の地域離れがある。そこで「東北から日本を元気にする」をテーマに、祭り、家族、食、医療、環境・産業の5分野における各県の新たな取り組みや活動を、7～11月の間に6回にわたり各紙同一紙面で特集シリーズとして紹介。読者に対して、自県や隣県についての新たな気付きや発見を共通コンテンツとして伝えた。さらに紙面と連動して、「HIRAIZUMI 元気アクションライブ」、未来創造イベント「新しい魅力を未来へ」を開催。この2つのイベントに AJOSCの助成が活用された。

「震災からの復興はまだ道半ばではありますが、皆で前



「未来想像イベント」採録紙面 (11月15日付 岩手日報朝刊)



平泉に約200人の若者が集結した

を向いてその先のステージに進もうという気持ちを込め、さらに今年度は若者に対して東北の魅力を発信し啓蒙啓発することで東北を元気にしていこうというコンセプトで活動してきました。4月の後半から7新聞社の現場担当が毎週1回のミーティングを重ね、よりよい紙面づくりを目指しました。同じ紙面が同日に7紙に掲載されるのは業界としては画期的なことで、この連携あってこそだと思います。そして何より、東北を元気にするためのアクションとして、若者にアピールするイベントを開催できたことは大きな成果でした。そう話すのは、今年度のプロジェクトの幹事社(毎年各社持ち回り)を務める岩手日報社の高橋敬弘さん。

### 世界遺産の町・平泉に若者を呼ぶライブと東北の魅力を発信するイベントを開催

「HIRAIZUMI 元気アクションライブ」は、9月22日、平泉小学校の体育館で開催された。これに先立つ9月5日に、元モーニング娘。の高橋愛さんが、中尊寺をはじめ世界文化遺産に登録されている平泉の5つの構成資産を自転車で巡る「世界遺産サイクリング」を体験。「古いイメージがありましたが、実際に来てみると町がきれい。歴史や文化を学んでみると平泉は若者世代でも思い切り楽しめる場所です」と感想を述べた。ライブは高橋愛さんをはじめ東北地方ゆかりのアーティストらが出演し、会場は岩手県内外から集まった約200人の若者の熱気に包まれた。「これを機に、平泉が若者の訪れる世界遺産の町へと変わり始めてくれるといいですね。」と高橋さん。

未来創造イベント「新しい魅力を未来へ」は、10月13日、盛岡市のいわて県民情報交流センター(アイーナ)で開催され、本年度の総括として、特集紙面のパネルが会場に展示された。イベントでは、フリーアナウンサー生島ヒロシさんによる「言葉のチカラ」と題した基調講演や岩手医大寺山靖夫教授による医学講座に続いて、「～discover～東北の魅力、旬発見」をテーマにパネルディスカッショ

### 担当者より



充実した2つのイベントを開催できました

東北七新聞社協議会  
岩手日報社  
東京支社営業部  
高橋敬弘さん

「HIRAIZUMI 元気アクションライブ」では平泉に若者の元気が集結し、「未来創造イベント」は充実した内容のプログラムで来場者からも大好評でした。このようなイベントを運営できたのもひとえにAJOSCの助成のおかげです。心より感謝申し上げます。

ンを展開。NPOやビジネスなどの世界において東北で活躍する若い世代の視点から、東北の人々や地域のつながりといった身近にある魅力が掘り起こされ、発表された。来場者は約400人に達し、「岩手で開催してくれてありがとう」という声も多く聞かれた。

「若い世代が豊かに暮らせ、活躍できる素地は地方にこそあるのだということ、イベントや紙面を通して伝えられたかなと思います。これからの東北に必要なことは、次世代を担うチカラを東北の地で育むこと。そのために地方新聞社が連携して何が出来るのかをこれからも考えていきたい」と、高橋さんは決意を新たにす。

地方における若者の地方離れは一朝一夕に解決できる問題ではない。しかし、こうした活動を草の根的に継続していくことこそ地方新聞社の真骨頂といえるだろう。



イベント会場の特集紙面のパネル展示に見入る来場者